

# 抽象的人間的労働と価値の質的規定性について（下）

佐々木 隆 治

## 目 次

### はじめに

1. 抽象的人間的労働とはなにか
2. 抽象的人間的労働は労働が私的労働としておこなわれる場合にだけ価値を形成する
3. 抽象的人間的労働はそれじたいとしては素材的なものであるが、その対象化である価値は人間たちの関わり *Verhalten* の産物であり、純粹に社会的なものである
4. それじたいとしては素材的なものでしかない抽象的人間的労働は、人間たちが社会的分業を営んでいる場合には、ある社会的性格をもつ
  - (1) 抽象的人間的労働はどのような社会的性格をもっているのか（以上、第67巻第4号）
  - (2) 商品の価値はいかにして労働の社会的配分を可能にするのか（以下、本号）
5. 抽象的人間的労働が歴史的貫通的にある社会的性格をもつという事柄と、商品生産関係においては抽象的人間的労働が私的労働の独自の社会的形態となるという事柄を混同してはならない
  - (1) 私的労働の独自の社会的形態としての抽象的人間的労働
  - (2) 価値形態と抽象的人間的労働
6. 抽象的人間的労働の認識を可能とする特殊歴史的な社会的条件を抽象的人間的労働の存在条件と混同してはならない
7. 抽象的人間的労働の対象化としての価値が資本として主体化し、もっぱら価値増殖の観点から具体的に有用労働が編成されるようになるという意味での労働の「抽象化」を、抽象的人間的労働という概念それじたいと混同してはならない

### むすびにかえて

#### (2) 商品の価値はいかにして労働の社会的配分を可能にするのか

以上の考察により、抽象的人間的労働と価値の関係はもはや明らかであろう。とはいえ、抽象的人間的労働が価値として対象化されることによって、いかにして労働の社会的配分が実現されるのかという点については、さらに立ち入った検討が必要である。

繰り返し見てきたように、なんらかの共同社会においては各人の労働は直接に社会的性格をもっている。つまり、どの生産部門にどれだけの労働を配分するかを何らかの仕方でも決定したうえで、それぞれの労働がおこなわれる<sup>1)</sup>。この場合、人間たちは有用労働としての社会的性

---

1) もちろん、この決定の仕方は共同社会の性格によって異なり、たとえばすでにみたような農民家族では家父長制的な伝統にしたがってなかば無自覚的に労働の配分が行われるので、このことが明確に意識されるわけではない。

格も（どの生産部門の労働か）、抽象的人間的労働としての社会的性格も（どれだけの労働か）、直接に考慮していることになる。

ところが、全面化した商品生産社会においては、私的生産者による労働は直接に社会的性格を持っておらず、どの生産部門にどれだけの労働を振り分けるかをあらかじめ社会的に決定して労働することはできない。だから、商品生産社会においては私的労働の社会的性格を商品に表すことによって、社会的分業を可能にする。つまり、私的労働の具体的有用的労働としての社会的性格を商品の社会的使用価値に表し、抽象的人間的労働としての社会的性格を商品の価値に表し、これによって社会的総労働の適切な配分を可能にするのである。

まず、私的労働の具体的有用労働としての社会的性格を商品の社会的使用価値に表すということからみてみよう。どんな労働でも、それが有意味なものであるなら、その有用労働としての側面により、ある使用価値を生み出すのは当然のことである。だが、ここで意味されているのは、それだけではない。共同体においては、はじめから社会にとって必要なものが「なに」かが合意されており、その合意された必要にしたがって何らかの種類のある有用労働を行う。ところが、商品生産社会においては人格的紐帯が切断されてしまっているため、はじめから社会にとって必要な物は何にかを合意して生産することはできない。それゆえ、商品を互いに付き合わせ交換する際に、「他人」に欲求されることをつうじて、はじめて、どんな種類の有用労働が必要だったのかが明らかになるのである。だから、ここでは他人にとって有用なものを生産するという具体的有用労働としての社会的性格は直接に現れず、その労働の生産物の使用価値が他人の欲望を満たすということをつうじて、間接的、事後的に確認されるのである。

では、私的労働の抽象的人間的労働としての社会的性格を商品の価値に表すということはどういうことか。共同体の場合、「なに」のための労働が必要なかだけでなく、それに「どれだけの労働を配分するのかもあらかじめ社会的に決定し、そのうえで労働をおこなう。つまり、どの部門に「どれだけの労働量を社会的総労働のうちから投入するかはあらかじめ決定されている。しかし、商品生産社会においてはそうではない。私的生産者たちは労働をおこなうまえに、こうした社会的決定をおこなうことはできない。それゆえ、私的労働の抽象的人間的労働としての社会的性格を商品の価値に表し、この価値が商品の交換比率を規制するというをつうじて、間接的、事後的に抽象的人間的労働としての労働の社会的性格を確認するのである。

商品の交換比率を規制する価値によって、抽象的人間的労働としての社会的性格が間接的、事後的に確認されるということについては、なお説明が必要であろう。

共同体の場合、生産様式が分配様式を規定するという意味では労働の配分と生産物の分配は関連しているが、基本的には両者は別の事柄である<sup>2)</sup>。個々人の労働と個々人への生産物の分

---

2) 例えば、生産が私的労働によって行われるのなら、生産物の分配は商品交換によって実現され、生産が人格的紐帯に基づく共同労働によって行われるのなら、生産物の分配は人格的紐帯にもとづいて実現される。この意味では、どんな社会形態においても、生産様式が分配様式を規定する。しかし、

配は直接には関連していない。ところが商品生産社会においてはそうではない。私的労働の社会的性格は直接には現れず、商品によって示されるほかなく、それが現実に確認されるのは商品交換の場面でしかない。そして、商品交換とは生産物の個々人への分配にほかならない。だから、商品生産社会においては、生産物の分配がなされる交換をつうじて、同時に、労働の適切な配分がなされなければならない<sup>3)</sup>。それゆえ、商品生産社会では、商品交換の基準となり、その比率を規制する価値が、同時に、労働の配分においても役割を果たさなければならない、ということになる。

では、なぜ商品の価値は直接には商品交換の基準でしかないのに、適切な労働の配分を可能にするのだろうか。私的生産者たちの生産活動が、商品交換の基準としての価値によって、制御されているからである<sup>4)</sup>。

『資本論』第一部の商品章においては生産手段の存在が捨象されている。これを前提とするならば、私的生産者たちにとっての生産コストは自分が費やした一定量の抽象的人間的労働以外の何物でもない。彼らは抽象的人間的労働というコスト（時間および労力）を費やして生産した物を、そのコストを基準にして、できるだけ高い交換比率で交換しようとし、あるいは逆に、そのコストに見合わない低い交換比率で交換することを避けようとするだろう。というのも、共同的な人格的關係が存在しない商品生産社会においては、自分が費やした抽象的人間的労働というコストと無関係に商品交換を行うのなら、自分の生活を再生産していくことができないからである。

このように、商品生産者は、共同的な人格的紐帯から引き剥がされた私的個人であるがゆえに抽象的人間的労働の社会的性格に直接には何の関心も持たないが、商品生産に費やされた抽象的人間的労働の量には関心をもたざるをえない。こうした事情によって、私的生産者は、生産物に対象化された抽象的人間的労働の量、すなわち価値を基準として、たえずより有利な交換比率を目指すことを強制されている。

それゆえ、私的生産者たちは、需要が供給を上まわっており、価値よりも有利な交換比率を

---

共同体においては、労働の配分と生産物の分配が直接に関連する必要はない。というのも、人格的紐帯にもとづいて労働配分を行う共同体においては、労働を生産物分配によって直接に動機づける必要はないからである。

3) 「そして社会的労働の連関が個々人の労働生産物の私的交換としてあらわれる社会状態においては、この一定割合での労働の配分が貫徹される形態こそが、これらの生産物の交換価値にほかならないのです」(MEW 32, S. 553)。

4) ここでは価値による労働の社会的配分を説明するかぎりでは、価値量について言及するにすぎない。それゆえ、以下では、労働の強度や熟練度や複雑労働、市場価値の問題については考察しない。価値量についての詳細な検討は別稿で行いたい。また、もう一点注意を促しておけば、価値法則が貫徹するのは全面的な商品生産関係においてであり、そこでは価値形態は必然的に貨幣形態とならざるをえない。しかし、以下では労働の社会的配分を明らかにする限りで価値量を扱うのだから、価値形態の問題は捨象されており、したがって貨幣の存在も捨象されている。

実現できる生産部門には集中し、逆に、供給が需要を上まわっており、価値よりも低い交換比率しか実現できない生産部門からは逃避していく<sup>5)</sup>。このような行動を通じて、平均を取れば、商品の交換比率は価値に一致し、それぞれの生産部門に需要をみとることができる労働が配分されるのである。こうして、「偶然的な、たえず揺れ動く、私的労働の生産物の交換比率において、それらの生産に社会的に必要な労働時間が規制的な自然法則として暴力的に貫徹する」ことによって、「互いに独立に営まれているが、社会的分業の自然発生的な分枝として全面的に依存し合っている私的労働がたえずその社会的に均衡がとれた限度に還元される」(MEGA II/6, S. 105-106)。

商品生産社会における諸個人は、あらかじめ社会の需要を正確に把握して労働することはできないが、そのかわり自分たちの労働生産物の交換比率(貨幣を前提するならばこれは価格に表示される)からそのことを間接的、事後的に把握することができる。これが私的利害を追求する諸個人の振る舞いを規制するのである。こうして、商品生産社会においては、需要に見合った労働をその生産部門に投入するのならば、その抽象的人間的労働の量にみあった交換力を獲得することができるというインセンティブをそれぞれの私的生産者たちに与えることによって、労働配分が成し遂げられている。ここでは、抽象的人間的労働としての労働の社会的性格は、人格的關係において直接に考慮されるのではなく、私的利害を追求する私的生産者たちが抽象的人間的労働の対象化である価値を交換の基準とし、それゆえまた、生産の基準とするということをつづじて、間接的に考慮されているのである<sup>6)</sup>。

ここで注意しなければならないのは、私的生産者が価値を基準として行動すると言っても、

---

5) なお、ここでは需要は前提とされ、不変なものとして扱われている。だが、資本主義的生産様式においては、価格変動や資本蓄積の程度、資本主義的分配関係の変化などにより、需要はたえず変動する。人格的紐帯に依拠するがゆえに、社会的必要を前提することのできる共同社会とはこの点で異なる。とはいえ、ここでは共同社会で人格的關係にもとづいておこなわれていた労働配分が、商品生産社会において物的關係をつづじていかに実現されるのかということだけを問題にしているのだから、さしあたり以上のような需要の変動は捨象して考察してよいのである。ほんらいの需給關係については、資本主義的生産様式の基礎範疇を規定したうえで、はじめて論じることができる。「ここでまったくついでに述べておきたいのであるが、「社会的欲求」の側は、すなわち需要の原理を規制するものは、本質的には様々な階級相互の關係や階級のそれぞれの経済的地位によって、したがってとりわけ第一に労賃にたいする総剰余価値の割合、第二に剰余価値が分割される様々な部分やカテゴリー相互の比率によって制約される。こうしてここでもまた、需給關係が作用する基礎が展開されてからでなければ、需給關係からはなにも説明されえないということがわかる」(MEGA II/4.2, S. 256)。

6) 具体的有用労働の社会的性格も同様である。私的生産者たちは、労働生産物が社会的使用価値として通用するか、すなわち他人の生産物と交換できるかを考慮することをつづじて、具体的有用労働としての労働の社会的性格を間接的に考慮する。それゆえ、彼らの関心事は、自分の労働が社会の役に立つかどうかではなく、自分の生産物が他人の生産物と交換できるかどうかでしかない。とはいえ、具体的有用労働の場合、その労働の対象化は生産物そのものにおいて現物形態で現れるので、具体的有用労働と商品の社会的使用価値の關連を把握することは困難ではない。

彼らが自分たちの支出した抽象的人間的労働の量を正確に知っていて、それを自覚的に交換の基準とするわけではない、ということである<sup>7)</sup>。そのような理解は三重に誤っている。

第一に、人格的紐帯を切断された社会に生きる私的生産者は、自分たちの労働を直接に社会的なものとして通用させることはできない。たとえば、小麦生産者が小麦10kgの生産に費やした労働が何時間であろうと、そのことは他の私的生産者にとっては何の意味も持たない。「生産物の交換者たちがさしあたり実践的に関心を持つのは、彼らが自分の生産物とひきかえに他人の生産物をどれほど受け取るのか、したがって、生産物がどのような比率で交換されるのか、という問題」(MEGA II/6, S. 105)でしかない。つまり、彼らが意識するのは自分が生産した使用価値によって他人が生産した使用価値をどれだけ入手できるのかということであり<sup>8)</sup>、自分や他人が生産に費やした労働時間にしたがって生産物を交換しようとはしない。もし生産者が生産に費やした労働時間を確認しあい、その比率にしたがって交換を行うのだとすれば、それはもはや私的生産者としての関係ではなく、したがってその交換は商品交換ではない。むしろ、人格的紐帯をもたない私的生産者たちは、互いの労働の社会的性格を直接に考慮することができないからこそ、それを商品の属性において間接的に考慮せざるをえないのである<sup>9)</sup>。

第二に、マルクスも強調しているように、「人間たちは彼らの生産物を互いに価値として関連させるのは、それらの物象が同種の人間的労働のたんなる物象的外皮として通用するからではない。逆である。彼らは彼らの様々な生産物を交換において互いに価値として等置すること

7) このような理解の代表例はエンゲルスの『資本論』第三部への補遺である。エンゲルスは、『資本論』第一部第一章の価値論を歴史的に存在したとされる単純商品生産社会に還元しているが、実際には価値法則は商品生産が全面化する資本主義的生産様式においてはじめて貫徹するのであり、『資本論』第一章第一篇で扱われる商品生産関係は資本主義的生産関係の抽象にほかならない。

8) それゆえ、商品交換はさしあたり、各々の生産者がより有利な交換比率を実現するために相争う、たんなる偶然的なプロセスであるかのように見える。このような交換の外観を理論化したのが、サミュエル・ベイリーである。ベイリーの理論においては、商品の価値が交換価値として現象するのではなく、逆に商品の交換価値から価値という幻想的な観念が生まれるとされる。価値から価値形態を考察するのではなく、価値形態から価値を把握しようとするあらゆる議論は、ベイリーと同様の転倒した観念にとらわれている。

9) 「たとえば一枚の紙券がx労働時間を表示するというように、なぜ貨幣は労働時間そのものを直接に表現しないのかという問題は、きわめて単純に、なぜ商品生産の基礎の上では労働生産物は商品として現れなければならないのかという問題に帰着する。というのは、商品として現れるということは、商品と貨幣商品とへの商品の二重化を含んでいるからである。あるいは、なぜ私的労働は、直接に社会的な労働として、私的労働の反対物として、取り扱われえないのかという問題に帰着する。……たとえば、オウエンの「労働貨幣」が貨幣でないのは、ちょうど劇場のチケットが「貨幣」でないのと同じである。オウエンは、直接的に社会化された労働を、すなわち商品生産と真っ向から対立する生産形態を前提している。労働証券は、ただ共同労働にたいする生産者の個人的分担と、共同生産物のうち消費に向けられる部分にたいする彼の個人的請求権を確認するだけである」(MEGA II/6, S. 121-122)。

によって、彼らは彼らの様々な労働を互いに人間的労働として等置する。彼らはそれを知らないが、それを行うのである」(MEGA II/6, S. 104-105)。つまり、私的生産者たちが自分たちの労働を抽象的人間的労働として関連させるのは、生産物を価値として関連させることの結果でしかない。私的生産者は自分たちの労働を抽象的人間的労働として等置することを無自覚のうちにやっているのである。

第三に、このように私的生産者が無自覚のうちに形成する商品生産関係じたいが、この関係の内実、すなわち各人の労働の関係を覆い隠す。というのも、そこでは、「生産者たちにたいして、彼らの私的諸労働の社会的連関は、……諸人格の、彼らの労働における直接的な社会的関係としてではなく、むしろ諸人格の物象的關係および諸物象の社会的関係として現れ」(MEGA II/6, S. 104)、「人格的な連関は物象的な形態によって覆い隠される」からである(MEGA II/5, S. 46)。

では、私的生産者たちは価値が抽象的人間的労働の対象化であるということを実感していないにもかかわらず、どうして価値量 = 対象化された抽象的人間的労働の量を基準として行動するのであろうか。私的生産者たちは、商品生産に費やした抽象的人間的労働の量、すなわち商品の生産に社会的に必要な労働時間をなんらかのかたちで考慮せずには、自分たちの生活を再生産していくことができないからである。

私的生産者は、もはや人格的紐帯に依存して生きていくことはできない。彼の命綱は商品交換だけである。それゆえ、私的生産者は無原則に交換を行うのではなく、できるだけ有利な交換比率を追求する。たとえば、小麦生産者は小麦10kgを鉄1kgとではなく、鉄2kg、あるいはそれ以上の鉄と交換することを追求する。とはいえ、私的生産者は同じ生産部門の生産者との競争や交換相手との競争にさらされており、恣意的な交換比率を実現することはできない。もし現在の生産物が不利な交換比率でしか交換されないのなら、彼はより有利な交換比率を実現できる生産部門へと移るだろう。ところで、このとき、彼にとって交換比率の有利不利を判断する基準は何であろうか。彼にとっての本源的コストである抽象的人間的労働以外にはありえない。つまり、私的生産者は自分が一定の抽象的人間的労働を費やして生産した生産物によって、どれだけの生産物を交換において獲得することができたかを判断基準にするほかない<sup>10)</sup>。

10) もちろん、この判断に際して明確に抽象的人間的労働という概念を意識するのではないが、ポール・スウィージーも述べているように、労働時間と入手できる生産物との関連は意識せざるをえない。「猟師は彼の時間を二時間費やすことによって、一匹の海狸かあるいは二頭の鹿か、いずれかを手に入れることができる。さて、いま「市場において」一匹の海狸が、一頭の鹿と交換されると想像しよう。このような事情においては、誰も海狸を捕獲するような愚かなことはしないだろう。なぜならば、一時間で一頭の鹿を捕獲し、そのあと、交換によって一匹の海狸を手に入れることができるのに対し、もしも海狸を直接手に入れようとおもえば、二時間を要するからである。そうだとすれば、こういう状態は不安定であり、持続きはしない」(ポール・スウィージー『資本主義発展の理論』都留重人訳、新評論、1967年、55頁)。

同じだけの抽象的人間的労働を投下したにもかかわらず、自分の生産部門の生産物が他の生産部門の生産物と比べてより少ない生産物としか交換することができないのなら、不利な交換比率しか実現することができていないということになる。逆もまた然りである。このように、私的生産者は、生産物をそれに要した労働量にしたがって交換することはしないが、自分が生産に費やした抽象的人間的労働の量と自分が交換によって入手する他人の生産物との関係にはたえず考慮を払わざるをえないのであり<sup>11)</sup>、このような考慮が価値を基準とした行動へと彼を導く。そして、そのような私的生産者たちの振り舞いが商品に抽象的人間的労働の量に対応する価値量を与えるのである<sup>12)</sup>。

商品生産は物象的關係によって人格的關係を覆い隠し、価値の実体が抽象的人間的労働であることを隠蔽する。だが、それにもかかわらず、私的生産者たちは、商品交換をつうじて自分の生活を再生産しなければならないという社会的条件に強制されて、抽象的人間的労働の対象化としての価値を基準として交換をおこなわざるをえない<sup>13)</sup>。このように、私的生産者たちが、彼らの意識とかかわりなく、商品の交換比率において間接的に抽象的人間的労働の社会的性格を考慮するからこそ、彼らは商品生産関係における労働の社会的配分を成し遂げることができるのである<sup>14)</sup>。

11) 「どんな状態のもとでも、人間は——発展段階の相違によって一様ではないが——生活手段の生産に費やされる労働時間に関心をもたざるをえなかった」のであり (MEGA II/6, S. 102)、このことはもちろん、商品生産社会でも妥当する。ただ、関心の持ち方がそれ以前の社会とは異なり、社会的に支出された労働時間ではなく、私的に支出された労働時間を考慮するのである。

12) それゆえ、彼らはさしあたり有利な交換比率を目指して行動するだけであるが、その行動は価値を基準としたものにならざるをえず、偶然的に変動する交換比率のうちに「一定の慣習的な固定性」(MEGA II/6, S. 105)を見いだすことになる。つまり、偶然的に変動する交換比率のうちに、その変動を規制する価値を発見するのである。しかし、それだけでは価値の実体を認識することはできない。商品の交換比率が「一定の慣習的な固定性にまで成熟すると、この割合はあたかも労働生産物の本性から生じるように見える」からである (ibid.)。商品生産関係においては抽象的人間的労働の社会的性格は必然的に商品の価値性格として現象し、しかもこのような物象的關係の形成を私的生産者たちは無意識のうちに遂行しているのだから、商品の価値性格は労働生産物にはじめから属している自然属性であるかのように見えるのである。マルクスは、このような転倒した認識を物神崇拜と呼んだ。物神崇拜は錯覚であるが、たんなる恣意的な錯覚ではなく、商品生産関係が必然的に生み出す錯覚である。なお、物象化と物神崇拜の関係については、拙著『マルクスの物象化論』社会評論社、2011年、第4章を参照されたい。

13) 価値の質的規定性を軽視し、その量的規定性にだけ注目する議論のなかには、私的生産者たちが商品交換によって自分の生活を再生産しなければならないという事情が価値を基準とした行動を生み出すのではないと主張するものもある。そうした議論は、私的生産者が剰余労働をするのであれば、その分の価値は交換によって補填される必要がないと考えるのである。しかし、私的生産者がこのような行動原則をとることはありえない。商品交換には偶然性がつきまわっており、商品が思惑通りに販売できない可能性はいつでも存在する。私的生産者はこのような偶然的な商品交換だけに依存して生活を再生産しなければならないのだから、必要労働に対応する生産物だけではなく、可能な限り最大限の生産物の取得を追求するのである。

14) 資本主義的生産関係からの抽象である商品生産関係においては商品の価値性格を媒介にして抽象的人間的労働の量を考慮することができるが、私的生産者が利潤の最大化を原則として行動する資本家

それゆえ、私的生産者が価値を基準として行動するという事は、たんに私的生産者が自分たちの投下した抽象的人間的労働の量に応じて交換するという事を意味するのではない。むしろ、私的生産者たちが、彼らの私的利害にとって決定的な意味を持つ商品の価値性格を媒介として、無意識のうちに抽象的人間的労働の社会的性格を考慮し、それによって労働の社会的配分を実現しているということの意味するのである<sup>15)</sup>。しばしば誤解されているが、価値量の問題はたんに商品の交換比率が価値量によって規定されるという点にあるのではない。価値量をつうじた労働の社会的配分こそが根本問題なのである<sup>16)</sup>。このように、抽象的人間的労働が歴史貫通的にもつ社会的性格の理解は、価値量の問題の解決においても決定的に重要なのである<sup>17)</sup>。

---

となる資本主義的生産関係においては商品の価格変動の中心点は生産価格となり、それはもはや抽象的人間的労働の量とは直接には対応しない。とはいえ、価値とは量的に異なる生産価格においても、私的生産者たちはやはり抽象的人間的労働の社会的性格を考慮しており、だからこそ資本主義的生産関係においても労働の社会的配分が成立するのである。この詳細なメカニズムについては別稿で検討したい。

- 15) なお、労働の社会的性格を直接に考慮できず、商品価値において抽象的人間的労働の社会的性格を考慮し、労働の配分を成し遂げなければならないという事情は、価値量の観点からすれば、平均的な条件のもとで同じだけの人間の労働力を支出したとしても、その労働が複雑労働なのか、単純労働なのかによって、対象化される価値量が異なるという事態を生み出す。だが、このことは価値の実体である抽象的人間的労働それじたいが「純粋に社会的なもの」であることの根拠にはならない。むしろ、この問題は、価値が人間の労働力一般の支出としての抽象的人間的労働の社会的性格の表示であることを基礎にしてこそ、解決できるのである。注4でも述べたように、この問題の詳細な検討は別稿で行いたい。
- 16) この点はすでにスウィージーによって明確に指摘されている。「抽象的な観点からすれば、量の価値論は、もっぱら諸商品が相互に交換される相対的割合を規制する法則を発見することだけを問題としているように見える。じじつ正統学派の理論は事柄をこのように考えた。つまり、交換価値だけが問題なのだ。しかし、われわれがすでにみたとおり、マルクスにとっては、交換価値は、たんに現象形態にすぎないのであって、その背後には価値自体がかくされているのである。……商品が価値であるということは、それが対象化された抽象的労働であるということ、あるいは別の言葉で言えば、それが富を生産する社会の総活動力の一部を吸収していることを意味している。いまもしわれわれが、抽象的労働は時間の単位で測ることができるという点に想いを致すならば、交換価値から区別された量的範疇としての価値の意義は、明瞭となる。マルクスの言葉をかりていえば、「……価値量は、社会的労働時間にたいする或る必然的な、その商品の形成過程に内在する関係を表しているのである」。量の価値論の主な課題は、一つの大きいさとしてのこの価値の定義から導かれてくる。それは、商品生産者の社会において、それぞれ異なった生産領域への労働力の配分を支配する法則にかんする研究であって、それ以上のもでもなければ、それ以下のものではない」(スウィージー、前掲書、39-40頁)。
- 17) イサーク・ルーピンは、抽象的人間的労働の素材的性格を否定してしまうために、抽象的人間的労働が労働の社会的配分において果たす役割を明確に捉えることができない。たしかに、ルーピンは、労働の同等性を「生理学的に等しい労働 社会的に同等化された労働 抽象的労働の三つに区分し、  
が及び」と無縁ではないことを示唆するが、これを「純粋に社会的なもの」とみなすかぎり、この関連は曖昧にならざるをえない。そのため、ルーピンは価値の同等性を私的人格の法的同権性によって基礎づけようとする。「法の原理にもとづくのではなく、私法といわゆる自由契約に基礎づけら



## 5. 抽象的人間的労働が歴史的貫通的にある社会的性格をもつという事柄と、商品生産関係においては抽象的人間的労働が私的労働の独自の社会的形態となるという事柄を混同してはならない

### (1) 私的労働の独自の社会的形態としての抽象的人間的労働

すでに述べたように、私的生産者たちが労働生産物にたいして価値という「純粋に社会的」な力を与えるようにして関わるのは、彼らの私的労働が直接には社会的性格をもっておらず、私的生産物の交換をつうじて社会的関係を成立させなければならないからであった。ここでは、私的労働は直接には社会的なものとしては通用せず、価値において抽象的人間的労働として互いに関連しあうことしかできない。

「私的労働は、他面では特殊な有用な私的諸労働のどれもが別の種類の有用な私的労働のどれとも交換されるものであり、したがってこれらと等しいものとして通用する限りでのみ、それら自身の生産者たちの多様な欲望を満たす。互いに「まったく」ことなる諸労働の同等性は、ただ、現実の不等性の捨象、諸労働が人間的労働力の支出として、抽象的人間的労働として、もっている共通な性格への還元においてしか、成り立ちえない」(MEGA II/6, S. 104)

「商品生産者の一般的な社会的生産関係は、彼らの生産物にたいしてそれを商品とするようにして関わり、したがって価値とするようにして関わり、この物象的な形態において彼らの私的労働を同等な人間的労働として互いに関連させあうということにある」(MEGA II/6, S.109)

---

れた個々人の労働活動の組織化が、現代社会の経済構造のもっとも際だった特徴である。交換という形態、交換される価値の同等化、個々の私的経済単位の間での生産関係の基礎的形態もまた、ここから生じる。交換における商品の同等性は、現代社会の基本的生産関係、すなわち、同権的で自律的であり相互に独立している経済主体の間での関連としての商品生産者間の関連、の物象的表現である」(イサーク・ルービン、『マルクス価値論概説』竹永進訳、法政大学出版局、1993年、81頁)。しかし、このような理解はマルクスの理論的把握とはまったく異なっている。マルクスにおいては、私的労働こそが商品生産関係の基礎であり、これが価値を媒介とした商品交換を必然とし、商品交換が商品所持者としての法的同権性の関係、すなわち所有関係を生み出す(この点については拙著『マルクスの物象化論』第6章を参照されたい)。したがって、ルービンがいう私的人格の法的同権性はむしろ商品生産の産物なのである。すでに指摘したように、このようなルービンの理論的誤謬の根源は、素材的なものと社会的なものを単純に二分し、その絡み合いを考察しなかったところにある。なお、ルービンの理論的誤謬の根源が素材的なものと社会的なものの単純な二分法にあるということについては、Axel Kicillof and Guido Starosta, 'On Materiality and Social Form: A Political Critique of Rubin's Value Form Theory', *Historical Materialism*, vol. 15, no. 3 (2007) がすでに指摘している。

マルクスはこのような意味で、「互いに独立した私的労働の独自の社会的性格は人間的労働としてのそれらの同等性のうちにあり、労働生産物の価値性格の形態をとる」(MEGA II/6, S. 105)と述べたのである。つまり、私的労働は社会的に通用する形態を、価値において、抽象的人間的労働としてのみ、獲得することができるのであり、これが「私的労働の独自の社会的性格」をなすということになる。

したがって、私的労働によって社会的分業を成立させる場合には、抽象的人間的労働は、どんな形態の有用労働であるかにかかわらず、有限な社会的総労働の一部分を費やしたのだという社会的性格をもっているだけではない。それは同時に、「私的労働の独自の社会的性格」をなす。つまり、どんな労働も抽象的人間的労働としては同じ社会的意義をもっているということが、ここでは同時に、それぞれの私的労働が社会的に通用する際の形態をなすのである。というのも、私的労働は抽象的人間的労働の対象化としての価値の媒介によってのみ社会的性格を獲得しうるのだからである。それゆえ、商品生産社会においては、抽象的人間的労働はいわば二重の役割を果たすことになる。

マルクスはこのことを初版においてとくにわかりやすいかたちで述べている。

②「これらの私的労働の社会的形態は同等な労働としてのそれらの相互関係であり、したがって、千差万別の様々な労働の同等性はただそれらの不等性の捨象においてのみ存在しうるのだから、人間的労働一般としての、人間的労働力の支出としての、あらゆる人間的労働が、その内容や作業様式がどうであろうと、実際にそうであるものとしての、それらの相互関係なのである。どんな社会的労働形態においても様々な個人の労働はまた人間的労働として互いに関連させられているが、ここではこの関連じしんが労働の独自に社会的な形態として通用するのである。しかし、いまや、これらのどの私的労働もその現物形態においては抽象的人間的労働というこの独自に社会的な形態をもたないが、それは商品がその現物形態においてたんなる労働膠着物、すなわち価値という社会的形態をもたないのと同じである」(MEGA II/5, S. 41)

「どんな社会的労働形態においても様々な個人の労働はまた人間的労働として互いに関連させられている」という叙述は、まさに抽象的人間的労働の歴史貫通的な社会的性格について指摘したものにほかならない。商品生産社会においては、「この関連じしん」、すなわち抽象的人間的労働としての歴史貫通的な社会的性格じたいが、「労働の独自に社会的な形態として通用するのである」<sup>18)</sup>。ただし、マルクスも注意を促しているように、私的労働の抽象的人間的労働

18) なお、抽象的人間的労働という労働の歴史貫通的な属性が、商品生産においては、私的労働の社会的通用形態という独自の役割を果たすことは、『資本論』及び草稿『資本論』第一巻のための補足と変更」における次の文章からも見て取ることが出来る。「こうして、一般的価値形態は、商品世界の

働としての側面は、現物形態においては、私的労働の独自に社会的な形態とはならない。あくまでその対象化である価値において、抽象的人間的労働は私的労働の独自な社会的形態となるのである<sup>19)</sup>。

これにたいして、人格的紐帯にもとづく社会においては、抽象的人間的労働が労働の社会的形態をなすのではなく、具体的有用労働が労働の社会的形態をなす。

②② 「そこで今度はロビンソンの明るい島から暗いヨーロッパの中世に目を転じてみよう。あの独立した男にかわって、ここではだれもが従属しているのがみられる——農奴と領主、臣下と君主、俗人と聖職者。人格的依存関係が、物質的生産の社会的諸関係をも、その上に築かれている生活の諸部面をも特徴付けている。しかし、まさに人格的依存関係が、与えられた社会的基礎をなしているからこそ、労働も生産物も、それらの現実性とは違った幻想的な姿をとる必要はないのである。労働や生産物は夫役や貢納として社会的機構のなかに入って行く。労働の現物形態が、そして商品生産の基礎の上でのように労働の一般性ではなくて、その特殊性が、ここでは労働の直接に社会的な形態なのである。夫役は、商品を生産する労働と同じように、時間で計られるが、しかし、どの農奴も、自分が領主のために支出するものは自分自身の労働力の一定量だということを知っている。坊主に納めなければならない十分の一税は、坊主の祝福よりもはつきりしている。それゆえ、ここで相対する人々がつけている仮面がどのように評価されようとも、彼らの労働における人格と人格の社会的関係は、どんな場合にも彼ら自身の人格的關係として現れるのであって、物象と物象との、労働生産物と労働生産物の社会的関係に変装されてはいないのである」(MEGA II/6, S. 107-108)

人格的紐帯にもとづく社会においては、人間たちは生産物をたがいに突き合わせ、交換することによって社会的関係を取り結ぶ必要がない。それゆえ、労働生産物を価値物として関連させあう必要もない。彼らは自分たちの労働を直接に社会的なものとして通用させることができるのであって、労働の現物形態、すなわち具体的有用労働が「労働の直接に社会的な形態」に

---

内部では労働の一般的人間的性格が労働の独自な社会的性格をなしているということを明らかにしている」(MEGA II/6, S. 98)。「労働の一般的性格あるいは抽象的性格は、商品生産においては、労働の社会的性格である。というのも、それはさまざまな労働生産物に潜んでいる労働の同等性の性格だからである」(MEGA II/6, S. 28-29)。

19) さらに、(2) でみるように、私的労働が価値において抽象的人間的労働として現実に社会的に通用する形態を獲得するためには、価値形態が必要である。価値形態においては、等価物は価値を体現する価値体としての規定を受け取るのだから、等価物商品を生産する私的労働はその現物形態のままに抽象的人間的労働を体現する労働となり、したがって直接に社会的な労働となる。商品を生産する私的労働は、価値形態を媒介として、この等価物商品を生産する労働と関連することによって、はじめて抽象的人間的労働として社会的に通用する形態を獲得するのである。

なるのである。この例では、「労働や生産物は夫役や貢納として社会的機構のなかに入って行く」のであり、「どの農奴も、自分が領主のために支出するものは自分自身の労働力の一定量だということを知って」おり、「坊主に納めなければならない十分の一税は、坊主の祝福よりもはっきりしている」<sup>20)</sup>。

もちろん、ここでも抽象的人間的労働は歴史貫通的な意味での社会的性格をもっており、労働の社会的配分を規制していることには変わらない。むしろ、ここでは労働における人格の関係は物象の関係に「変装」してはいないのだから、封建的伝統によって各人がどんな「仮面」をつけていようと、またそれがどのように評価されていようと、直接的生産者がどの有用労働にどれだけの抽象的人間的労働を費やすかが直接に考慮される。しかし、中世の封建社会では、抽象的人間的労働が労働の社会的形態をなすことはない。

マルクスは同様の事柄を『経済学批判』において述べている。

②③「中世の賦役と現物給付をとってみよう。ここでは現物形態にある個々人の特定の労働が、労働の一般性ではなくて特殊性が社会的紐帯をなしている。あるいはまた最後に、すべての文化民族の歴史の入り口で見られるような、自然発生的な形態での共同的労働をとってみよう。ここでは、労働の社会的性格は、明らかに個々人の労働が一般性の抽象的形態をとることによって、つまり彼の生産物が一般的等価物の形態をとることによって媒介されているのではない。個々人の労働が私的労働になることを妨げ、むしろ個々の労働を直接に社会有機体の一分枝の機能として現れさせるものは、生産に前提されている共同体である。交換価値で表される労働は、個別化された個々人の労働として前提されている。それが社会的なものになるのは、その正反対の形態、抽象的一般性の形態をとることによってである」(MEGA II/2, S. 113)。

すでに確認してきたことから、この引用②③が述べている内容は明らかであろう。ここで問題になっているのは、明らかに、有用労働や抽象的人間的労働がもつ歴史貫通的な社会的性格ではなく、労働が社会的に通用し、互いに関連し合うための形態である。マルクスは、労働が社会的に通用するための形態が、物象化された社会においては抽象的人間的労働であり、なんらかの人間の紐帯にもとづく共同体においては有用労働であると述べているのである。

ところが、この両者を区別することができず、抽象的人間的労働を商品生産社会に限定し、特殊歴史的なものとして解釈してしまう論者が後を絶たない。そのような論者はしばしば自説を根拠づけようとして、しばしば以下のような引用文をあげる。

20) 本稿では必要労働と剰余労働の区別には立ち入らなかったが、言うまでもなく、この両者の区別は抽象的人間的労働を前提とした場合にのみ考えることができる。

②④ 「しかし、フランクリンは、交換価値に含まれている労働を、抽象的一般的労働として、個人的労働の全面的外化から生じる社会的労働として展開しなかったから、必然的に、貨幣がこの外化した労働の直接的な存在形態であることを見損なった」(MEGA II/2, S. 134)

②⑤ 「リカードは、労働がそれにあつては価値の要素であるところの独自の形態を理解しなかったものであり、とくに、個々の労働が抽象的に一般的な労働として、またこの形態で社会的な労働として現れなければならないことを把握しなかったのである」(MEGA II/3, S. 1324)

②⑥ 「自然のものをなんらかの形態で取得するための合目的活動としては、労働は人間の存在の自然条件であり、人間と自然とのあいだの素材変換の、あらゆる社会的形態から独立な、一条件である。これにたいして、交換価値を指定する労働は労働の独自の社会的形態である。……裁縫労働が上着の交換価値を生産するのは、裁縫労働としてではなく、抽象的一般的労働としてであり、そしてこの抽象的一般的労働は裁縫師が縫い上げたのではない一つの社会的関連に属している」(MEGA II/2, S. 115)

これらの引用文を、脈絡を考えず、恣意的に読むなら、抽象的人間的労働を特殊歴史的なもののみならず解釈も成り立つようにみえるかもしれない。しかし、そのような解釈は誤りである。というのも、ここでマルクスが述べているのは、私的労働が抽象的人間的労働としてのみ社会的に通用する形態を獲得するという事柄だからである。

まず、ほぼ同趣旨の引用文②④⑤から見てみよう。ここで言われるのは、抽象的労働がつねに社会的労働であるということではない。そうではなく、私的労働が社会的関係を取り結ぶためには価値という媒介が必要であり、しかもその価値は異なる使用価値の媒介となるべきものであるのだから、抽象的人間的労働だけが価値として対象化されるのであり、この抽象的人間的労働の対象化としての価値においてのみ私的労働が社会的形態を獲得するという事柄が述べられているのである。もちろん、このように言うときにも、抽象的人間的労働の歴史貫通的な社会的性格、すなわち人間的労働としての同等な性格が前提されていることを忘れてはならない。そのような前提があるからこそ、抽象的人間的労働を価値として対象化し、互いに異なる私的有用労働の社会的形態とすることができるのである。

引用文②⑥は、②④や②⑤よりも誤読を誘発しやすい叙述になっているが、同様に解釈することができる。「交換価値を指定する労働は労働の独自の社会的形態である」という文章は、抽象的労働がつねに労働の独自の社会的形態であることを意味しない。そうではなく、抽象的労働が交換価値を指定する場合には、抽象的労働が私的労働の独自の社会的形態となるということの意味しているのである。「裁縫労働が上着の交換価値を生産するのは、裁縫労働としてではなく、抽象的一般的労働としてであり、そしてこの抽象的一般的労働は裁縫師が縫い上げたので

はない一つの社会的関連に属している」という文章も同様である。この文章は抽象的労働が社会的関連だと言っているのではなく、抽象的労働が私的労働にもとづく社会的分業という社会的関連に属している場合にだけ、抽象的労働が価値を生むということを述べているのである。もっとも、全体として引用文<sup>20)</sup>の叙述は誤読を誘発しやすいので、『資本論』においてはこのような叙述は消えている。

抽象的人間的労働が歴史的貫通的にある社会的性格をもつという事柄と、商品生産関係においては私的労働が抽象的人間的労働という形態において社会的に通用する独自の形態をもつという事柄を混同すること、これが抽象的人間的労働を特殊歴史的なものとする有力な「根拠」となってきたのであるが、このような混同が事柄の無理解を示すことはいまや明らかであろう<sup>21)</sup>。

## (2) 価値形態と抽象的人間的労働

すでにみたように、私的労働の生産物どうしを関連させるためには、私的生産者がそれらにたいして価値物とするようにして関わることが必要であった。だが、生産物にたいして価値物とするようにして関わるとしても、価値物となる生産物それじたいは依然としてたんなる有用物であるにすぎない。価値は「まぼろしのような対象性」であるにすぎず、価値物となる生産物をいくら眺めてもその価値を見て取ることはできない。それゆえ、私的生産者たちが生産物に価値という社会的力を与えて相互に関わり合うには、この価値対象性を目に見えるように表示しなければならない。これを可能にするのが価値形態にほかならない。価値を表現する価値形態を獲得することによってはじめて、私的労働の生産物は価値として現実に関連しあうことができるのである。

この価値形態は、労働との関係からみれば、私的な具体的労働を抽象的人間的労働として社会的に通用する形態にするという役割を果たす。(1) でみたように、私的労働は価値において抽象的人間的労働としてのみ社会的に通用する独自の形態を獲得することができるのであるが、価値形態はまさにこれを媒介し、実現するのである。ところが、このことにかんするマルクスの叙述がしばしば誤解され、抽象的人間的労働が「純粹に社会的なもの」であることの「根拠」とされてきた。それゆえ、ここでは、価値形態と抽象的人間的労働の関係について簡単に確認しておこう。

マルクスは、商品章第三節の価値形態論において次のように述べている。

<sup>27)</sup> 「たとえば上着が価値物としてリンネルに等置されることによって、上着にひそんでいる

21) なお、抽象的人間的労働が私的労働の独自の社会的形態をなすからといって、抽象的人間的労働それじたいが特殊歴史的なものであるわけではないことはつとに指摘されてきたことである。例えば、高橋秀直「『抽象的人間労働＝歴史的範疇』説の検討」『弘前大学経済研究』第10号、1987年を参照。

労働がリンネルにひそんでいる労働に等置される。ところで、たしかに上着を作る裁縫は、リンネルを作る織布とは異なる具体的労働である。しかし、織布との等置は裁縫を、両方の労働において現実に等しいものに、人間的労働というそれらに共通な性格に、実際に還元する。そのさい、この回り道を通して、織布もまた、それが価値を織り出す限りでは、裁縫から区別される特徴を持たず、したがって抽象的人間的労働であることが語られるのである。ただ異なった商品の等価表現だけが、異なった商品にひそんでいる異なった労働を実際にそれらの共通物に、人間的労働一般に還元することによって、価値を形成する労働の独自の性格を出現させる」(MEGA II/6, S. 83)

この引用文は、しばしば、価値形態をつうじてはじめて抽象的人間的労働が生成するというように理解されてきた。つまり、ある商品が他商品を自分に等置することにより、はじめて抽象的人間的労働が生成し、具体的有用労働が抽象的人間的労働という社会的形態を獲得することができるというのである。そのように解釈するのであれば、抽象的人間的労働は商品生産関係にだけ存在する労働の特殊な社会的形態ということになるだろう。

しかし、マルクスは価値形態をつうじて抽象的人間的労働が生成するとはどこにも書いていない。マルクスが述べているのは、価値形態が「価値を形成する労働の独自の性格を出現させる」ということなのである。では、このことはどのようなプロセスによってなされているのか。詳しくみてみよう。

まず、「上着が価値物としてリンネルに等置されることによって、上着にひそんでいる労働がリンネルにひそんでいる労働に等置される」。「上着が価値物としてリンネルに等置される」という事態を通俗的に表現するならば、私的労働の生産物であるリンネルの価値を同じ私的労働の生産物である上着で表現するために、リンネルに値札を付け、その値札に上着と書き込むということである。この際、上着は、リンネルと等しい価値をもつ物であることを認められ、値札に書き込まれているのだから、あるがままの姿で直接に価値物として社会的に通用することのできる形態、すなわち等価形態を与えられている。他方、リンネルの価値表現において、上着はリンネルと等しいもの、すなわちリンネルと同様に価値をもつ物であるという資格においてリンネルと関連づけられているにすぎない<sup>22)</sup>。それゆえ、このリンネルの価値表現関係の内部では、上着は価値物としての意義しかもたず、その現物形態のままに価値を体現するもの、

22) 価値形態論においてはもっぱら価値表現だけが問題となり、人間の欲望は捨象されている。というのも、価値形態論の課題は、人間たちが労働生産物を価値として現実に関連させるためには、一般的価値形態がかならず必要になることを示すことにあるからである。私的労働の生産物を商品として扱うためには、人間の意志や欲望とは関わりなく、かならず一般的価値形態が成立しなければならない。だからこそ、マルクスは価値形態論において「商品語」について語り、第二章の交換過程論においては、これを前提したうえで意志と欲望をもつ人格による交換を考察したのである。

すなわち価値体となる。リンネルはこの価値体としての上着によって自分の価値を表現するのである。

このとき、いま説明したプロセスを労働の側から捉え返すと、上着が価値体となることによって、上着を生産した裁縫労働は「両方の労働において現実に等しいものに、人間的労働というそれらに共通な性格に、実際に還元」される。つまり、リンネルの価値表現において上着は価値物としての意義しか持たず、直接に価値物として通用するのだから、上着を生産した有用労働もまた抽象的人間的労働としての意義しかもたず、その有用労働のままでいきなり抽象的人間的労働として通用する。リンネルの価値表現においては、裁縫労働はその有用的形態を捨象され、たんなる抽象的人間的労働に還元されるのである。ここで言われているのは、価値関係において、有用労働に抽象的人間的労働という労働の独自の性格が新たに付与されるということではない。そうではなく、上着が価値体になる関係においては、上着を生産する裁縫もまたその労働の有用的形態を捨象され、文字通り、抽象的人間的労働に「還元」されてしまうという事態にほかならない。そして、リンネルの価値が価値体としての上着によって表現される関係の内部では、リンネルを生産する織布労働が抽象的人間的労働に還元された裁縫労働と関連することによって、織布労働もまた、「それが価値を織り出す限りでは、裁縫から区別される特徴を持たず、したがって抽象的人間的労働であることが語られるのである」。

もちろん、商品の価値表現とは異なり、裁縫労働の抽象的人間的労働への還元と、それを「回り道」にした織布労働の価値形成的性格の現出は、人間たちにたいして直接に現象することはない。しかし、それは、価値表現において必然的に成立する物象と労働の内的関係を理論的に表現している。私的労働が社会的に通用するには、労働生産物に抽象的人間的労働の対象化である価値という属性を与え、それを商品にしなければならない。そして、商品として生産物を関連させるには、他商品の使用価値による価値表現が必要であり、商品は他商品を価値体とすることによってはじめて、現実に社会的に通用する価値形態を獲得する。それゆえ、これを労働の側から捉え返せば、私的労働は価値形態をつうじてはじめて現実に、価値において抽象的人間的労働として社会的に通用することが可能になる、ということができる。このように、価値形態論における抽象的人間的労働への還元についての叙述も、私的労働の独自の社会的形態の獲得にかんするものであって、それ以外のものではない。

## 6. 抽象的人間的労働の認識を可能とする特殊歴史的な社会的条件を抽象的人間的労働の存在条件と混同してはならない

抽象的人間的労働を特殊歴史的なもののみならず議論は、また、『経済学批判要綱』(以下、『要綱』と表記)の次の箇所を自説の「根拠」にすることが少なくない。



⑳ 「労働はひとつのまったく単純なカテゴリーにみえる。こうした一般性における——労働一般としての——労働の表象も太古からのものである。それにもかかわらず、この単純性において経済学的に把握するのなら、労働は、この単純な抽象を生み出す諸関係と同じように、一つの近代的カテゴリーである」 (MEGA II/1, S. 38)

㉑ 「ところで、労働一般によって、人間が——どんな社会形態のもとであろうと——生産する者として登場するさいの、もっとも単純で、もっとも太古的な関連のための抽象的な表現が見いだされたにすぎないかのように見えるかもしれない。これは一面では正しい。他の面からみれば正しくない。労働の一定種類にたいする無関心は、どんな種類の労働ももはやすべてを支配する労働ではなくなっているような、現実の労働諸種類のきわめて発展した総体を前提している。こうして、もっとも一般的なもろもろの抽象は、一つのもので多くのものに共通のものとして現れ、すべてのものに共有されているような、もっとも豊かな具体的発展のある場合にだけ、一般に成立する。そのときには、ただ特殊の形態でしか考えることができないうことはなくなるのである。他方では、労働一般というこの抽象は、ただ諸労働の具体的総体の精神的結果であるだけではない。一定の労働にたいする無関心は、諸個人がひとつの労働から他の労働に移っていくことが容易であり、労働の一定種類が彼らにとって偶然であり、それゆえどうでもよいものであるような社会形態に照応している。ここでは、労働は、カテゴリーにおいてだけではなく、現実においても、富一般の創造のための手段として生成しており、定めとして、ある特殊性のうちにある諸個人と癒合するということがなくなっている。このような状態は、ブルジョア社会のもっとも近代的な諸形態——アメリカ合衆国——でもっとも発展している。したがって、「労働」、「労働一般」、たんなる労働といったカテゴリーという抽象、近代経済学の出発点はここにおいて実践的に真実となる。こうして近代経済学がまっさきに掲げており、そしてすべての社会諸形態に妥当する太古からの関連を表現するもっとも単純な抽象は、それにもかかわらず、ただこの抽象の限りでは、もっとも近代的な社会のカテゴリーとして実践的に真実のものとなって現れるのである」 (MEGA II/1, S. 39-40)

㉒ 「労働のこの例が適切に示していることは、もっとも抽象的なカテゴリーでさえも、それらが——ほかならぬそれらの抽象のゆえに——すべての時代にたいして妥当性をもつにもかかわらず、この抽象という規定性の点からいえば、それ自身やはりまぎれもなく歴史的諸関係の産物でもあるということ、そしてこの完全妥当性をこの諸関係にたいしてだけ、この諸関係の内部でだけもつということである」 (MEGA II/1, S. 40)

何の前提もなく、これらの引用文だけを恣意的に読めば、あたかもマルクスが抽象的人間的

労働を特殊歴史的なものとなしただけのように解釈することは可能であろう。しかし、そのような解釈は次の二点を見落としてしまっている。

第一に、引用文<sup>29</sup>で問題にされているのは、抽象的人間的労働じたいの存在条件ではなく、抽象的人間的労働の認識を可能とする社会的条件である。ここでマルクスが述べていることを整理すれば次のようになる。まず、マルクスは、労働一般という言葉で後に抽象的人間的労働と述べる内容を表現しているが、この労働一般がどんな社会形態にも妥当する関連を表現するものであることを述べている。「すべての社会諸形態に妥当する太古からの関連を表現するもっとも単純な抽象」という句は端的にそのことを表現していると言えるだろう。したがって、マルクスは労働一般じたいを特殊歴史的なものだと見なしているわけではない。では、なにを特殊歴史的なものだと考えているのだろうか。それは、労働一般がカテゴリーとして成立する社会的条件にほかならない。マルクスはここで、労働一般という抽象がカテゴリーとして成立するためには、人々の労働の一定種類にたいする無関心が必要であり、この無関心が「どんな種類の労働ももはやすべてを支配する労働ではなくなっているような、現実の労働諸種類のきわめて発展した総体」と「諸個人がひとつの労働から他の労働に移っていくことが容易であり、労働の一定種類が彼らにとって偶然であり、それゆえどうでもよいものであるような社会形態」によってもたらされることを指摘している。労働種類への無関心をもたらす前者の条件が社会的分業一般であり、後者の条件が全面的な商品生産社会であることは明らかであろう。とりわけ後者の社会形態においては、労働一般はたんに「すべての社会諸形態に妥当する太古からの関連を表現する」だけではない。5でみたように、商品生産社会における労働一般は、たんに歴史貫通的な社会的性格をもつだけでなく、価値として対象化され、私的労働の社会的形態としての独自の意義を獲得するからである。この意味でマルクスは、労働一般という抽象が、「ただこの抽象の限りで」、すなわち価値において労働の社会的形態としての独自の意義を獲得する限りでは、「もっとも近代的社会のカテゴリーとして実践的に真実のものとなって現れる」と述べたのである。

第二に、『要綱』はマルクスがはじめて経済学批判を体系的に展開した草稿であり、しかも<sup>28</sup><sup>29</sup><sup>30</sup>はいずれも、『要綱』の冒頭に位置し試行錯誤が繰り返されている「序説」からの引用である。もちろん、『要綱』には後のマルクスによって本格的に展開される天才的な閃きがあふれているが、他方、いまだ事柄の定式化が不十分であり、後に明確に区別されることが区別されずに述べられることも稀ではない。引用文<sup>28</sup><sup>30</sup>は事柄としては<sup>29</sup>とほぼ同じ内容を述べていると言えるが、その内容が必ずしも明確に述べられているわけではない。それゆえ、これらの引用文を恣意的に解釈することも可能だろう。しかし、引用文<sup>28</sup><sup>30</sup>においても、問題となっているのは労働一般それじたいではなく、労働一般という「カテゴリー」であり、その「カテゴリー」が「単純性において」、あるいは「抽象という規定性の点からいえば」、近代の産物であることが述べられている。それゆえ、労働一般が価値として対象化され、労働の社会的形態

として独自の意義を獲得するかぎりでは、労働一般が「カテゴリー」として生成することができるという事柄を述べていると解釈するのが妥当である。いずれにしても、『要綱』、とりわけその冒頭に位置する「序説」の引用文だけを「根拠」に『資本論』以降の叙述を反駁するのは無理があると言えよう。

じっさい、マルクスは『資本論』において、抽象的人間的労働の認識を可能とする特殊歴史的な条件について明確に述べている。

③「しかし、商品価値の形態においては、あらゆる労働が同等な人間的労働として、したがって同等に通用するものとして表現されているということを、アリストテレスは価値形態そのものから読み取ることができなかったのであって、それはギリシアの社会が奴隷労働を基礎とし、したがって人間やその労働力の不等性を自然的土台としていたからである。価値表現の秘密、すなわち人間的労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに、はじめて解き明かすことができるのである。しかし、そのようなことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがってまた商品所持者としての人間の相互の関係が支配的な社会関係であるような社会においてはじめて可能なのである」(MEGA II/6, S. 91-92)

ここでは、『要綱』におけるような曖昧さはもはや存在しない。価値の同等性が人間的労働の同等性にもとづいているということは、商品生産が支配的な社会関係においてはじめて解き明かすことができる。というのも、そのような社会関係においてはじめて、人々の目に人間の労働が同等なものとして現れ、それゆえ、どんな具体的有用労働も同等な人間的労働の異なる形態でしかないということを理論的に把握する可能性が与えられるからである。

7. 抽象的人間的労働の対象化としての価値が資本として主体化し、もっぱら価値増殖の観点から具体的有用労働が編成されるようになるという意味での労働の「抽象化」を、抽象的人間的労働という概念それじたいと混同してはならない

人格的紐帯にもとづく社会においては、抽象的人間的労働はたんに具体的有用労働を量的な側面から捉えたものとして社会的意義をもつにすぎないが、物象化された社会においては、抽象的人間的労働だけが価値として対象化されることによって、有用労働から切り離され、独自の重要な意義を獲得する。価値に対象化される抽象的人間的労働の独自の意義は、価値表現と商品交換の必要性から価値の自立的姿態としての貨幣が生まれ、全面化した商品生産社会において自己増殖する価値である資本が成立すると、さらに重要なものになる。ここでは、有用労働

働としての社会的性格と抽象的人間的労働としての社会的性格がともに物象的連関を媒介として間接的、事後的に考慮されるというだけでない。むしろ抽象的人間的労働をいかに効率的に産出し、獲得するのかということこそが最も重要となり、ここでは有用労働はこの観点からのみ考慮され、編成されるのである。

このように、主体化した価値としての資本によって労働が形態的に包摂されると、労働力はもっぱら価値増殖の手段としてのみ扱われるようになる。マルクスは次のように述べている。

③② 「たんなる形態的關係，すなわち資本主義的生産の發展の低い様式にも發展の高い様式にも共通なその一般的形態を考察する場合でさえも，生産手段，すなわち物象的な労働条件は労働者に従属するものとしては現れず，労働者がそれらに従属するものとして現れる。資本が労働を使用するのである。すでにこの關係がその単純なあり方において物象の人格化であるとともに人格の物象化である」(MEGA II/4.1, S. 121)

③③ 「生産過程を労働過程の観点から考察すれば，労働者は生産諸手段にたいして，それを資本とするようにではなく，彼の合目的な生産的活動のたんなる手段及び材料とするようにして関わったのである。……生産手段を価値増殖過程の観点から考察するやいなや，事態は一変する。生産手段はただちに他人労働の吸収のための手段に転化した。もはや労働者が生産手段を使うのではなく，生産手段が労働者を使うのである。生産諸手段は，労働者によって彼の生産的活動の素材的諸要素として消費されるのではなく，労働者を生産諸手段自身の生活過程の酵素として消費するのであり，資本の生活過程とは自己自身を増殖する価値としての資本の運動にほかならない」(MEGA II/6, S. 309)

資本主義的生産關係は，資本家に労働力を販売し，資本家の指揮下にはいった賃労働者が，生産過程において，生産手段にたいしてそれを資本とするようにして，すなわち自己増殖する価値とするようにして関わることによって成立する。生産過程においては，労働力はすでに消費過程に入っており，資本にとってその価値はゼロである。しかし，労働力はその使用価値である労働において，生産手段にたいして資本とするようにして関わることをつうじて，生産手段の生産物への価値移転と生産物への新価値付加をおこない，資本の価値増殖を担うのである。このような關係においては，生産手段と労働者の關係が一変し，むしろ資本価値の担い手としての生産手段が労働者を消費するという転倒した關係が成立する。

そして，いったんこのような物象化された關係が成立するやいなや，労働時間の最大限の延長が追求されるとともに，生産の素材的条件じたいを価値増殖に適合的なように変容させる資本のもとへの労働の実質的包摂がすすむ。かつて職人として労働者が保持していた生産的知識や技能は剥奪され，資本のもとへと集中される。生産は労働者の都合にあわせて行われるので

はなく、労働手段である機械体系の画一的運動にしたがって行われる。こうして、労働は画一化され、無機質なものとなっていく。以上のような意味で、資本のもとへの労働の実質的包摂によって労働が「抽象化」されるという表現を使用したとしても、誤りではないだろう。たとえば、ルカーチは次のように述べている。「一方では、労働過程がしだいに拡大する規模で抽象的で合理的な作業部分に分解され、それによって労働者と生産物全体との関係が分断され、労働者の労働は機械的に繰り返される専門的機能に変形される。他方では、このような合理化のなかで、また合理化の結果、合理的計算の基礎である社会的必要労働時間は、はじめはたんに経験的にとらえられる平均的労働時間にすぎなかったが、のちには、労働過程がますます機械化され、合理化されるために、できあがった完結した客観性をもって労働者にたいするよう客観的に計算できるような労働課業となるのである」<sup>23)</sup>。

ところが、近年、このような実質的包摂にともなう労働の「抽象化」を抽象的人間的労働の「抽象」と混同してしまっている議論が存在する<sup>24)</sup>。そうした議論においては、まさに具体的有用労働の次元で抽象化された労働を「抽象的労働」として把握し、この「抽象的労働」が価値を産むと考えるのである。彼らによれば、この意味での「抽象的労働」こそが問題の根源であることになる。だが、言うまでもなく、『資本論』における抽象的人間的労働の概念は、この意味での「抽象的労働」とは全く異なる。たしかに、「労働の抽象化」は抽象的人間的労働が価値として対象化され、資本として主体化することによって生起する現象であるが、それはあくまでも具体的有用的労働そのものを価値増殖の観点から再編成することから生じる「抽象化」にすぎない。

もちろん、「労働の抽象化」の問題性を理論的に把握することは重要である。マルクスも、このことを資本のもとへの労働の実質的包摂として把握し、大工業が必然化する職業教育や技術教育によってそれに対抗する可能性を示している<sup>25)</sup>。とはいえ、「労働の抽象化」に対抗す

---

23) Georg Lukacs, *Geschichte und Klassenbewusstsein*, Malik, 1923, S. 99.

24) 典型例は、ジョン・ホロウェイ『革命』高祖岩三郎・篠原雅武訳、河出書房新社、2011年やモイシェ・ポストン『時間・労働・支配』白井聡・野尻英一監訳、筑摩書房、2012年である。

25) 「大工業は、資本の転変する搾取欲求のために予備として保有され自由に使用されうる窮乏した労働者人口という奇怪事を、転変する労働需要のための人間の絶対的な使用可能性によって置き換えることを、すなわち、一つの社会的な細部機能のたんなる担い手にすぎない部分個人をさまざまな社会的機能をかかわるがわる行うような活動様式をもった、全体的に発達した個人によって置き換えることを死活問題とする。大工業を基礎として自然発生的に発展した、この変革過程の一契機は工学および農学の学校であり、もう一つの契機は、労働者の子どもたちが技術学とさまざまな生産用具の実践的な取り扱いについて若干の授業をうける「職業学校」である [なお、フランス語版においてはこの一文は「ブルジョアジーは自分の息子のために工学や農学などの学校を設立したが、それはただ近代的生産の内的傾向にしたがったまでのことで、プロレタリアには職業教育の影しか与えなかった」となっている]。工場立法は資本からやっともぎとった最初の譲歩として、初等教育を工場労働と結びつけるにすぎないとすれば、労働者階級による政治権力の不可避的な獲得によって、技術学的教育が、

るだけでは問題の根本的な解決にはならない。というのも、実質的包摂は形態的包摂の必然的帰結だからである。資本主義的生産関係は、私的労働が価値を生み、価値が貨幣を必然化し、賃労働が資本を産出することによって絶えず再生産されている。この資本主義的生産関係そのものを変革することなしには、「労働の抽象化」の問題を解決することは決してできない。そして、そのためには労働の抽象化に対抗するだけでなく、資本主義的生産関係そのものを生み出している私的労働と賃労働という労働の特殊歴史的な形態を変革しなければならないのである。

では、この労働の特殊歴史的な形態を変革するための契機はどこにあるのか。マルクスはこの契機を、資本による人間と自然とのあいだの素材変換の攪乱に見いだした。価値は人間の労働力の支出としての抽象的人間的労働の社会的性格の表示であり、人間と自然とのあいだの素材変換を一面的にしか反映しない。にもかかわらず、価値が貨幣として自立化し、資本として主体化すると、素材変換を一面的に反映するにすぎない価値の自己増殖運動にしたがって、現実の素材変換が編成される。つまり、資本としての生産手段が抽象的人間的労働をいかに効率的に獲得し、吸収するののかという観点からのみ、人間と自然とのあいだの物質代謝が考慮され、編成されていくのである。このような一面的な論理による素材変換の編成は、それを攪乱させずにはいない。それは、人間と自然のあいだの素材変換において、長時間労働や「労働の抽象化」、さらには環境破壊など、深刻な亀裂を生み出す。そして、まさに、このような素材変換の攪乱こそが、人間たちにこれを生み出す労働の特殊歴史的な形態を変革し、人間と自然とのあいだの素材変換を、持続可能であり、かつ個人の自由な発展を可能にする形態で再建することを強制するのである<sup>26)</sup>。

このような理論的把握において重要なのは、物象的形態規定と素材の絡み合いを捉えること

---

理論的にも実践的にも、労働者学校のなかにその席を獲得するであろうことは疑う余地がない。また、生産の資本主義的形態とそれに照応する経済的な労働者の諸関係とが、そのような変革の酵素とも、また古い分業の止揚というその目的とも真正面から矛盾することは、同じように疑う余地がない」(MEGA II/6, S. 466 467)

26) だが、このことは正常な物質代謝が徹底的に破壊されることによって、自動的に変革が可能になるということの意味するのではない。じっさい、長時間労働によって心身を破壊され、実質的包摂によって精神的な能力を徹底的に剥奪された賃労働者は、労働できないということによって消極的に資本に抵抗することはできるが、能動的に資本に抵抗し、既存の関係を変革することはできない。また、自然環境が資本によって徹底的に破壊されてしまえば、それは長期的に修復不能になってしまうだろう。

それゆえ、変革の究極の根拠が資本による物質代謝の攪乱にあるということは、物質代謝が破壊し尽くされるまでただ待ち続けるということの意味するのではない。形態による物質代謝の攪乱、破壊に直面した人間たち、とりわけ労働する無所有者たちが、形態の力から、自分たちにとって不可欠な物質代謝を守るために抵抗せざるをえないこと、また、その抵抗をつうじて現在の物象化された関係、あるいはそれを正当化する近代的所有を不当だとする意識に到達しようということにほかならない。したがって、社会変革のためには、さしあたり資本主義的生産様式の内部で、物象の力を抑制し、無所有者たちの社会的力量を高める実践に取り組まなければならない。

であり、しかもこの絡み合いの媒介となるが人間的労働力の支出としての抽象的人間的労働にほかならないということである。抽象的人間的労働は素材変換の一契機であるにすぎないが、それが価値として対象化され、資本として主体化すると、むしろそれによって現実の素材変換が編成される。逆に言えば、価値が、抽象的人間的労働という一面的な契機であるにすぎないとはいえ、素材的实践の表現であるからこそ、その主体化としての資本は現実の素材変換を変容させ、それを攪乱させずにはいない。このような意味で、抽象的人間的労働は、物象的形態規定による素材変換の編成を把握するための最も基礎的かつ重要な媒介となる。それゆえ、社会的なものと素材的なものを単純に二分し、抽象的人間的労働を「純粹に社会的なもの」とする解釈は、その労働配分における社会的性格ばかりでなく、それが物象的形態規定と素材変換の媒介環としてもつ意義もまた見落とすことになったのである。

### むすびにかえて

以上の考察によって、抽象的人間的労働を特殊歴史的なもののみならず解釈の問題点を、ほとんどの論点について示すことができた。いまや、抽象的人間的労働を特殊歴史的なもののみならず根拠はたった一つしかない。それは、マルクスが価値に対象化される場合の人間的労働にかぎり、それを抽象的人間的労働と表現したということである<sup>27)</sup>。

しかし、この「根拠」もそれほど説得力はない。なぜなら、すでにみたように、抽象的人間的労働は人間的労働と同義であり、人間的労働は価値に対象化される場合とそうでない場合の両方のケースで用いられている。実際、フランス語版では第二版で抽象的人間的労働となっている箇所が「人間的労働」に書き換えられたり、その逆の書き換えがおこなわれたりしている<sup>28)</sup>。もし、抽象的人間的労働と人間的労働との区別が決定的に重要であるのなら、このように無造作な書き換えをするはずがない。

結局、抽象的人間的労働と書くか、人間的労働と書くかの違いは、たんにニュアンスの違いに過ぎないと思われる。つまり、人間的労働一般の支出という事柄じたいに着目した場合には

27) なお、白須五男『マルクス価値論の地平と原理』広樹社、1991年は、労働配分における抽象的人間的労働の歴史貫通的な社会的性格について理解を示しながら、この事実にも縛られ、抽象的人間的労働を特殊歴史的なものとして解釈しようとして、牽強付会な読解に陥っている。とりわけそれは、『資本論』商品章冒頭の解釈にみることができる。

28) 付け加えておけば、マルクスは『資本論』第一巻第二版の自用本において次のような書き込みをしている(マルクスが削除した箇所は取消線で示し、書き加えた箇所はアンダーラインで示した)。「それゆえ、ある使用価値あるいは財が価値をもつのは、抽象的まったき人間的労働がそれに対象化され、あるいは物質化されているからにほかならない」(MEGA II/8, S. 860)。「労働生産物の具体的性格とともにそれに表されている労働の有用的性格が消え去り、したがってこれらの労働の具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されず、すべてことごとく同じ人間的労働、抽象的人間的労働、すなわち人間的労働力の支出に還元されている」(MEGA II/8, 859)。

人間的労働と書き、その人間的労働が有用労働の捨象によって与えられたものなのだという事柄に着目した場合には抽象的人間的労働ないし抽象的労働と書いたのであろう。そして、このニュアンスの違いが、抽象的人間的労働が商品生産関係においてのみ使用されている理由なのではないかと推測される。というのも、すでにみたように、物象化された社会においては、抽象的人間的労働だけが価値として対象化されることによって、有用労働から切り離され、独自の重要な意義を獲得するからである。価値に対象化される抽象的人間的労働の独自の意義は、自立化した価値としての貨幣、そして主体化した価値としての資本において、さらに重要なものになる。おそらく、マルクスは、このような物象化された社会において人間的労働がもつ独自の意義を強調するために、抽象的人間的労働と書いたのではないだろうか。